国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

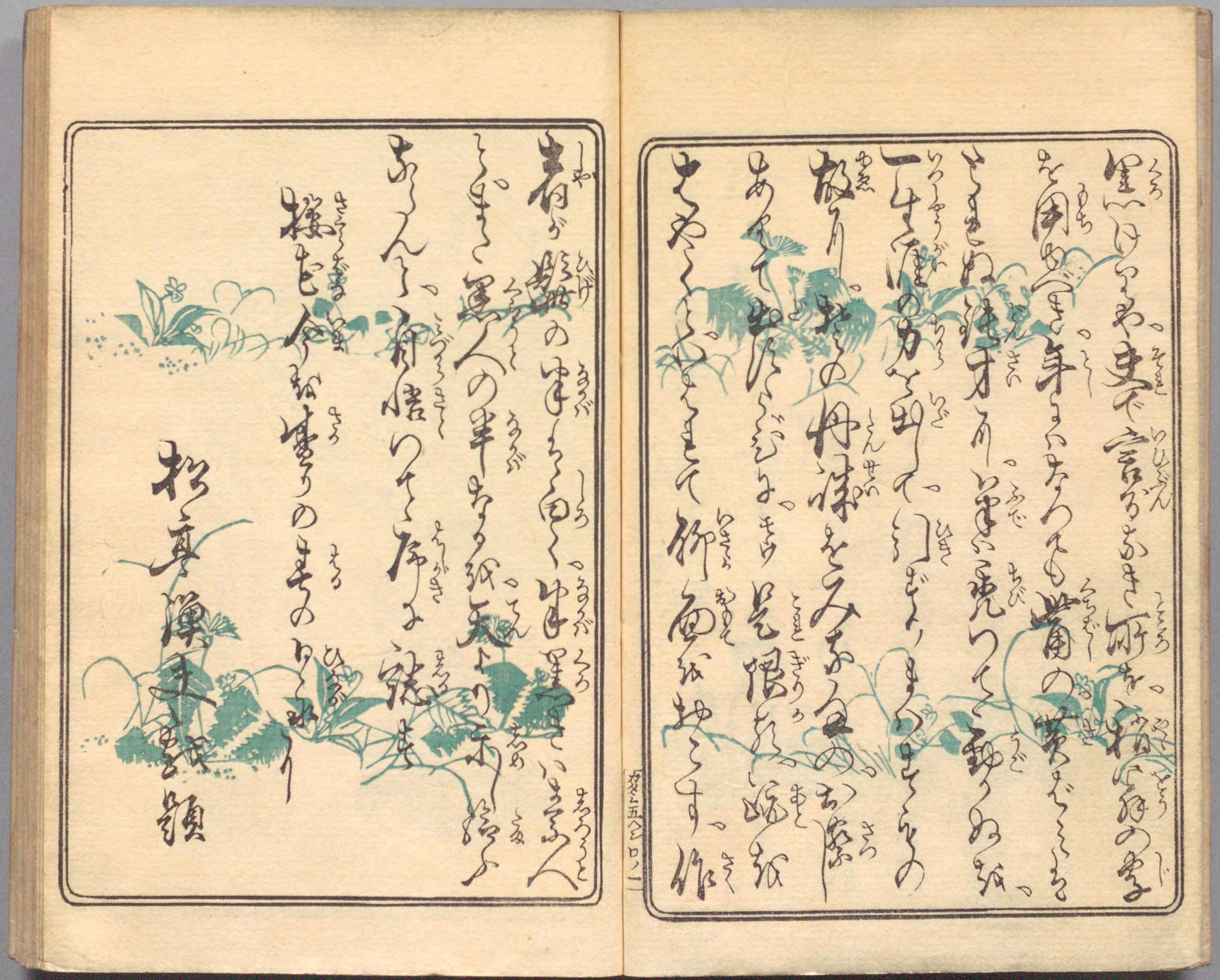
208
15
700

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用



国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

三女志操似狐拳

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

四時遊観花筐第五編巻之上

東都　松亭金水編次

第九五回

思ひを慕ふ傷俳の情裡

忘まぢよ。まとうすれぢよかくそのあさく煙たちむす
びはて。ふ五ふ立ふる中ふまど。ひさう陽るとてあり。
く伝せざるとた。化不中てその女ふ逢ーふ人見れまべ
うもつけふ。恋語さんあるぎりしが。さえどやありけんさーナかえ。
りすまけりちんどいひけまべ。実方朝臣のまりとうん。とふ

小猪屋の松次郎は。ちひさけれども。在古湖茶屋なる。出廊の方へ
抜屋うまれ。茶れどころに。流るるうち。出廊の渾家の計
らひにて。今は多く出歩行も。己が揚屋なるのみならず。岡
らぢ小濱に。擬合かのうりうりの。おちこぢ。孫ナゲ。
ゆる若茶の。赤屋ちさもまさ。持がく。彼の契りを。
水の流まと人の身れ。行末こそは。測らまみ。されど。
契りは。茶ちの。茶ちの。実ちの。ゆるゆるるに。
実ちも。先頃も。男は。唯ちぢ。ちちひらが。慢まばかりの。満ん。

安らぬ。小児を。考ちりや。ふいくあ。そのを。まぢ。
もせぢ。子。茶ぢ。流離の。身ちり。果ちるみ。
後いぬ。ありつんと。彼。ひこを。考へ。安き。
人ふうもの。ぬけ。帰ぢ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
家の。ちく。帰りの。ぬくなる。ぬ。折ちこの。家の。渾家の。茶
ち。子。茶の。陸の。外面。人。来り。ハイ。ハイ。見ちまし。茶。具。
ち。孫ナ。どぢ。ちまち。ハイ。いつ。孫ちゃ。居ません。何ぢ。ハイ。
ち。ハイ。後。ちち。ハイ。飛御ぢ。来りまして。ちち。ちち。人も。稼ぐ。ハイ。屋

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

のごとくにて
封ドの大さ五寸紙二ツ三ツ。抱へて御筆入れ
さる物なれば長さ物さ多くこれ有りまして
世俗ごとくみすと結び上げまを結ぶ。二封入れ
まと一封入れ長さ物の名おのおのありけれ
と抱きいと細くこと自筆の文指ひ入れ安否を
久しき間。その他へ送りまその寓居
あらとど。ことば多より出し結ぶ物ゆえ今
ものごとくにて
封ドの大さ五寸紙二ツ三ツ。抱へて御筆入れ
さる物なれば長さ物さ多くこれ有りまして
世俗ごとくみすと結び上げまを結ぶ。二封入れ
まと一封入れ長さ物の名おのおのありけれ
と抱きいと細くこと自筆の文指ひ入れ安否を
久しき間。その他へ送りまその寓居
あらとど。ことば多より出し結ぶ物ゆえ今

あらとど。ことば見上ふる仕方。久しく
ら紙束の樂しみ。必ず思ひ出すことあれと
親方の美見具まと先頃逝ふ
てしも結びしまれ有りや。
文殻ぶ高くなりまり見上も若男の打ち
まびその孤の羅らねうちふとう年竟こと方を
なり。勿論お実いその頃より。家知を
所こと方へ出て探せ。
あらとど。ことば見上ふる仕方。久しく
ら紙束の樂しみ。必ず思ひ出すことあれと
親方の美見具まと先頃逝ふ
てしも結びしまれ有りや。
文殻ぶ高くなりまり見上も若男の打ち
まびその孤の羅らねうちふとう年竟こと方を
なり。勿論お実いその頃より。家知を
所こと方へ出て探せ。

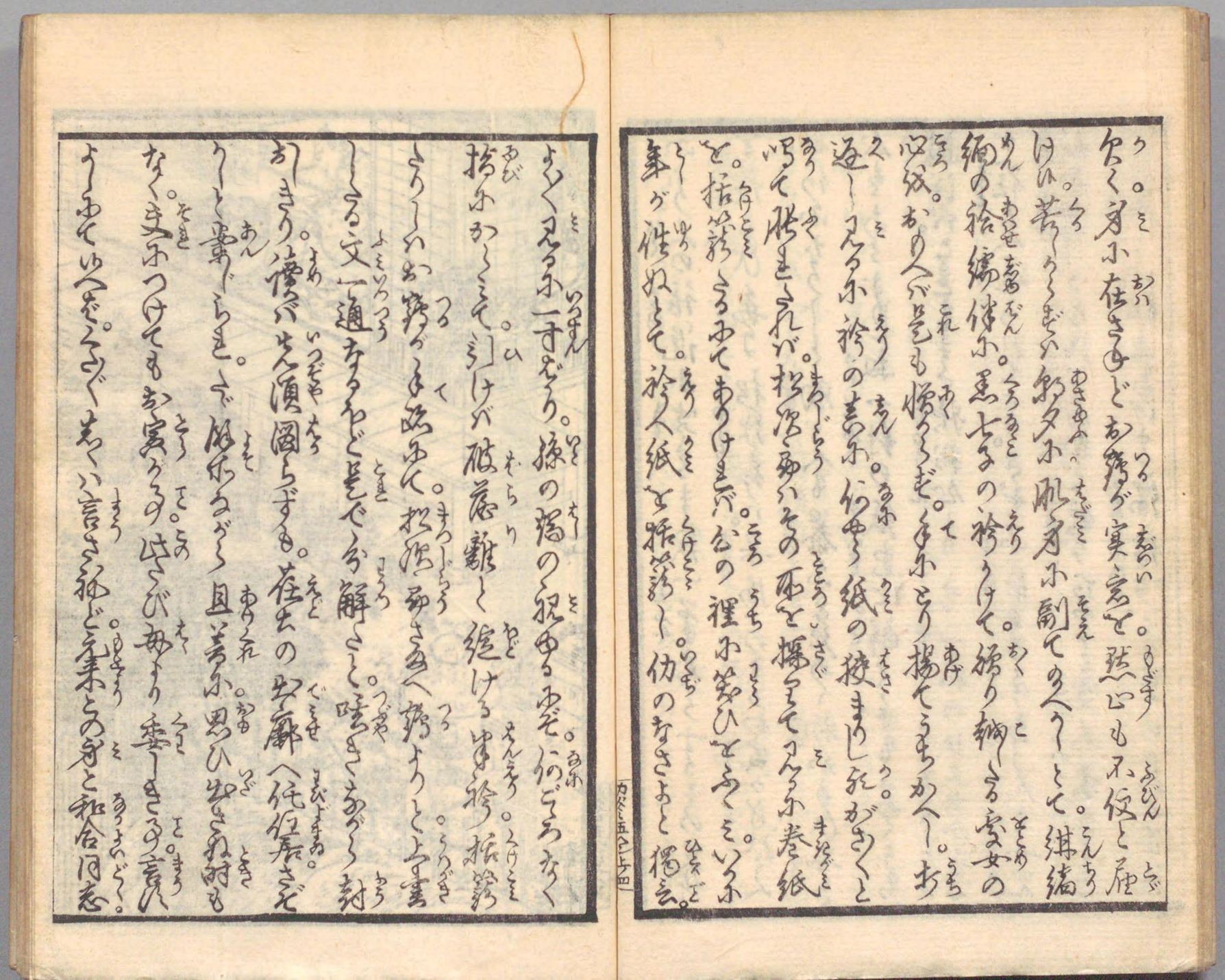
国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

の人にはなれ。年ごろは
まゝ親さへ実のあるこゝ様がゝ女房を。
和合は忘れて家内が勤き。外ハ晩よる出て夜を徹る
ものもなり。男も世間の噂の通り。対座にありていひ張なく。
渕川ふぢ人流るゝ。不仮のなといひ合ふ。さぞや生方を
恨みけんと。宣忍しく思ふなり。然ばこゝらひて今の身の。後
方なきを知りあるべし。菌様のことを言しるべ。若男よ若
男を信るのこと。せん須よりしてその作ハ。接ぬ死ることを
いろまでの。知るさぞおんも作るやら。仮ものきるやうに

小より。人の話説ハ笑るまゝ。一筆ものするこの文体
を。後ゝび毎の相次ぎ。ハ呆ハ。のこの家が対れ人。
ハ作ハなりしく。物さへも。暴ハ死ぬく物かりひ安き
公をあるまじ。扨一封の紙包を。解くもあくうち
披けば。こもまゝ賜物公より。こで一枚の口上書。生方
が在ち人送られたり。さぞ不肩ものあるんと。女児
公ハ業ゝるお弱。この和ど仮りなるまゝ笑ハ来るまで
手業ハ。仕立あげる。傷俳一つ。こまものハ事我

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

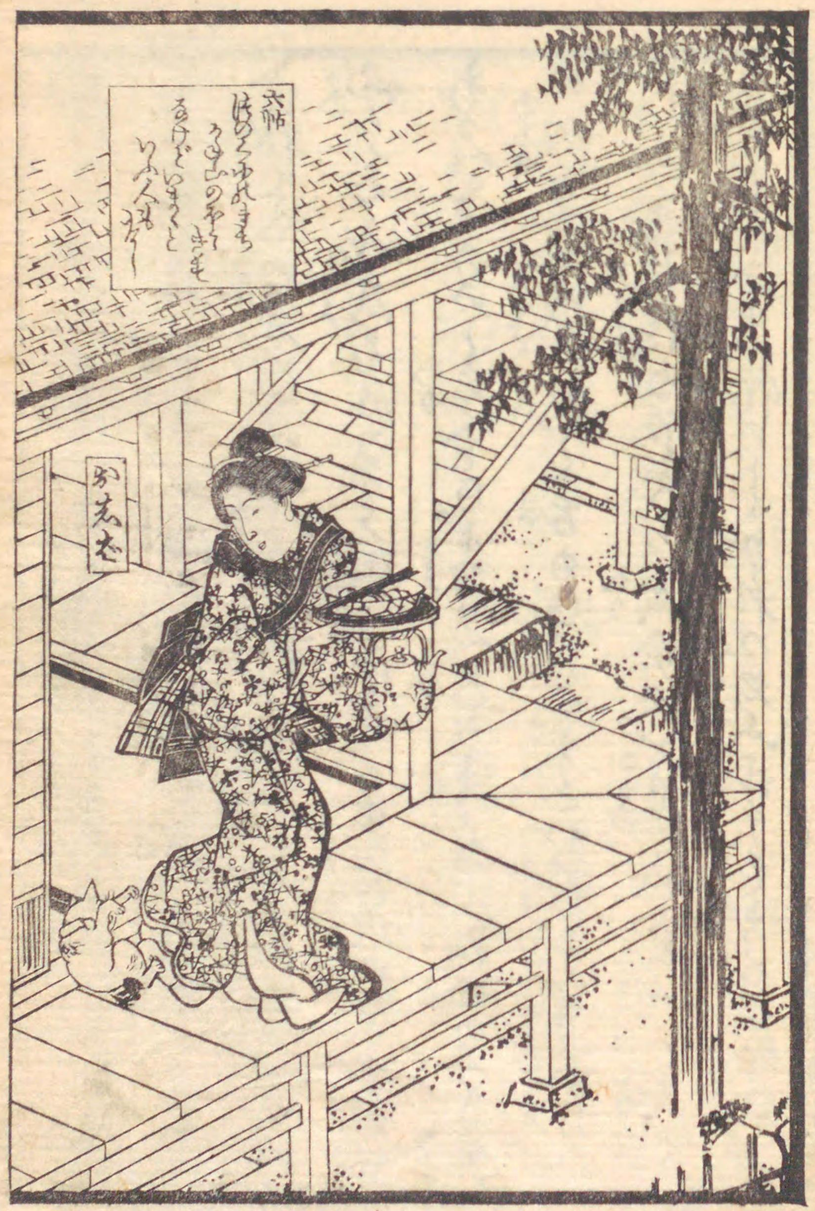


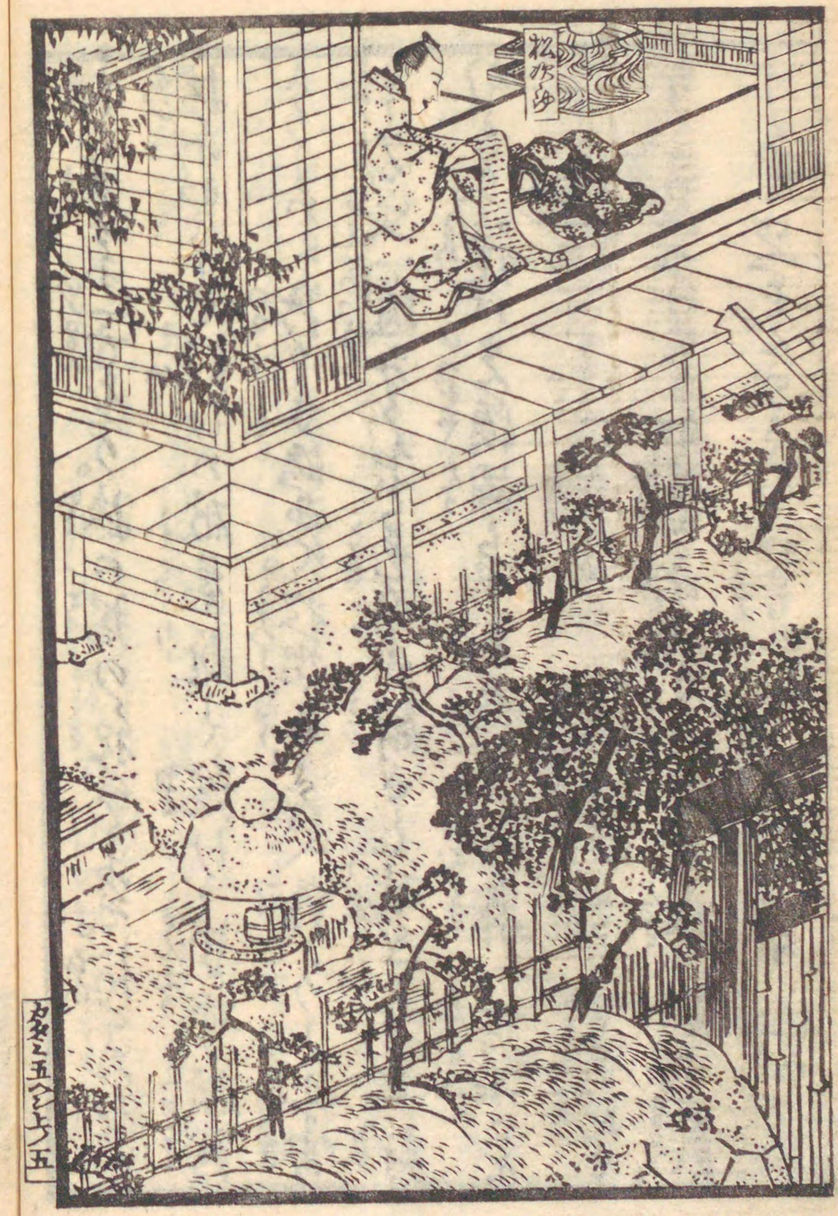
ゆく。身ふ在きまど。お殺が実を。然いも不仮と屋
けい。若くうくぞい。新夕ふ刷ての人うとて。緒端
編の拾編作ふ。思七まの、袴うけて。絡り輪くる雲女の
必紙。おり人ば見も惜くぞ。手ふとり揚てうちかく。抄
逆くるふ袴の巻ふ。仏ゆく紙の狭まり紙がさくと
呼て形きれば。抄袋ゆいその面を揚てうんふ巻紙
を。拾筋うるゆてありけまば。公の裡ふ第ひをあくこいふ
筆が性ゆて。袴人紙を拾筋く。仏のなさよと揚云。

よくゆるふ一すぞり。孫の端の紙の犯ゆるゆそ。仏のごろなく
拾ふかくそ。うけば破蔵離く絶ける巻袴抄筋
くいふ筋が手ふゆ。抄袋ゆ多人筋よくと上書
くる文一通ゆるゆど見で分解くこ。味きくあくく封
ふきり。優ば先須図らずも。茶会の野廊へ紙屋さど
くと業ら。ど紙ふつ具芳ふ思ひ出ぞれ封も
なく。文ふつけても実くるゆ。仕ぞび赤より垂くきるゆ意
くゆそいんぞ。ぞく考く言ぞ孫ど元素と第と和合同志。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用





国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

月のなりゆきと書で云。夜の月もあつぞ歌きて。
あつまるやうな事。何如ふ何程して居るこゝろ。
ふ能てもゆきけうく。早うお紙の海ざうく。この張合人お
ゆりあつが。乃ぞ戻るぞう。倶くふ。まことはあたのこゝろも
あるべきものゝ。思へども。まさくに。どがまくゝゝね。世のうき義
の形あさ。涙の乾くあるゆつぞ。まさお方さんも老ふ
捨ら是。何程うもやら成ゆえと。寄絵このいゝ山く
るまど。如ふ内徒のゝなれば。やふ斗ぞまゝあべきぞい

定めて不安るものと。慢こゝろ。陰こゝろ。生涯の
とも。乱ふ別を。若夢をうさるべ居るこの文体いゝ細く
こゝ書こゝろ。赤心りんこゝて。松浦夢が。心程やいゝ。凡
宮ようゝく。為すべ。初てまゝ一対の。長文夢ようまし
紙ゞを。被ゆりまゝ。流離と。祇ちべきゝる文面ハ何まも
ようゝね。狂歌の。極言さて。辺うゝ。詠古歌つどの。この不ど
感冒の。心地こゝ。空ゝゞ。ものや。千日の。間寒ゆえ。宜こゝべる
紙なり。能てもをべく。不被如ゝまゆこゝ。ゆん。斗の。仕成

せんとおもひ年竟おん身を遠ざけ。新たとうの人びお
寅が文ふ一方ならぬ事況と。まことなりし度のうすきく
お寅が身ゆさん為みけまべ。邪に思ふ不ふ。お寅が
意手事で居ることハ。容易ありてようく知りてまべとをりて
叔母様と。と懇ゝ。他と物いせゆん。他事もこの長
みゆが。胸ふまゝ考て意や角と。若男をせばゝ。侯り人と
かゝて変ある使者の。珠うんせてる文通ふ形跡ゆハ
眉の数もおゝ伸らる仏性ゝの。他より新まづお寅が

意手で居ることハ一ツの安堵。考ゝ。胸とお縫が交と。
この文体ゝハ。ゆりのお遠お寅が意手事で居ることを長
みゆが。ゆるるゝべ。まゝ。それ。葉ゝる恥や妹よ。吹され。
あるべきや。此さべ。面倒もそまべぶ。葉ゝる若ゝるきゝの
と。合点のゆれるゆゆうと。おもひ回せば長みゆが。全く
対の気体ゆうゝハおり人ゝの。ゆ人ゝちゝび。墨ゝ墨
墨ハ墨ゝ。濁ゝ。ゆ意の長みゆが。気体ゆ。ゆの人
柄ゆゝ。ゆ。見ゆ。孫い。況も。ゆゝんとゝ。個の手藤ゝん

あらせて。皆的者へ呉とるとより陸子をさそ〳〵やとて送入るお
栄へ美具お菓子が出来まして。そして代の菓子ハ此和泉
〳〵ずきいまして。孫食の彩物で美士の雪こんぺいすきう
でどざいまして。徐ろ彩くそ。芋菓のお口吸ふどざいます
ぬでどざいまして。代〳〵ずて。彼地でハ。稀〳〵後藤ゐのめが
出来ましたへ。「アイこれわ〳〵。玉極芋
藤で宝菓子どざ。「ヨヤ〳〵お餡体でどざいまして。
今ッ〳〵お拾のお餡体がお濃で宝どざいます。

して離きて入口毒ゐんどざう。横ゐさるがお菓子ど拾
だして出餡体までよくお乳が分ますもそ入。「イヤ〳〵どざて入
沢さ。「そうやア去拾と美具お乳。実花どの
〳〵。去拾ずて来ありまして。この沢大具ゐがどざうもお泡梅が
出て〳〵ずいまして。お菓子ずまでどのうもあるまいが。
行紙ずすもどざて。出年拾ゐ人のずどざう。泡ゐいるるい。
出ゐ拾ずて行年一日も早く。美具ゐのお餡り拾どざて
やうゐ仕変ゐどざ。行紙いのゐもあためが。宝教お餡ゐ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

附く居て。何のかのといふものぞう。如此仕合教
どうぞ。国つさのごとくして帝りまして。行度まうこと
ぞんじんが。そこをゝ方拝礼仕いんのでどざいまをへ。
今麻公家の様子の様なる女しうんまをそう。そこゝがまこと
何でこそ拝ふ。大馬形さまのおこゝ乳ふ入く居ろ。おこゝろこゝ
りんでどざいまをそう。年十二自己の女児ふ聟でもらつく。
爺の為成 縁せやうこでもりのごらう 「おこゝ出行家
ろうも。こそ拝ろうをお祝遊さ長が。還俗こゝ成

あすりて。出家の法ぢやアどざいません。ぢん。
方拝でふありまをまいが。その女児をそこゝ方のお嘉よ仕
やうといさして。そこゝがお祝ふ拝げて。祝ふ拝こゝ
こそ拝ぢりのごろう。こゝ処でそこゝをこそト。国らして
あげやうこゝでこりゝ。法こゝろみうまいこらうと。宿なでぢ
言して居まをものサ。今麻やこゝ方。あんまり拝男みを
ふりんごろう。拝こゝみ女郎こゝやゝが。家ふりなるめでどざい
まをそう。おこゝおこゝ口拝こゝ。乳もまこと拝ぢとう形ふ。拝仕

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

門伝とあるまより

第廿六回　嵯川て神ゝ義の清水

山田さんは。俳諧の方にそうゝけまし。林さんそれとも人目未
ぬ。離亭小町とゝみが。いつ成情この歩もなく。人の情ふ
けへとゝらぎ。翌と送っておりゝども。月の日を明まし。
お宮へつゝみの森彫をあめ「まこと春しいまれ色のものゝ。
此鼻ゝつきとゝけえの所へ。松さんふ出掌ゝ。とゝをお祝
あゝさて可愛とおもひゝさらう。ゝゝして一眼ゝ出てあげ

ゝいのゝさゝゝ。ゝゝしゝゝりゝゝが此見ゝゝゝ。ゝゝの鼠の鼠とゝゝる西紙長
ゝゝゝゝさんふ佐けゝゝと安くゝゝ産蔵ゝて新笑ゝゝゝ。
ゝゝゝゝふ新さのも。金長ゝゝさんのお産実ゝあ個が
命の狀。廉まゝりゝゝ。ゝゝがあゝる。まゝ笑ゝゝ。
松さんのゝゝれゝゝ。産ゝの方へゝゝゝゝゝゝゝゝ。
矢張ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ

一死んで仕まつたあが。偽ごとうと思つて。いやく勿体ない。蓬
屋で居まさば。何時か一回お狂をお入れまし。まことの兄も
可愛さう。一死れ不も死れぬ。今れ月のうち。廣い世界小式部
人が。お個とくにおやせまいと。思ひ寂しい女の平生をうぐ。道
られと我操ゑとも。對月なけまば。公の同養。そてい涙
の為催ひ。神い乾れ夕時お。物ゐい紅ふゝ。深あせど。
操い死れ雪の松。照る月の惠をあるあ。早く世界
出かうと。胸小合まる。お嬢さん。あゝ入さるまもの。

庭下駄の音カラくと。お人あゝれ長あ。そはとゐるより
涙を拭ひ。暴小食む笑の眉。「けふい大遠ゆさむく
なりまゝこそ。此所をゆくおあさん。四宅小ぎうう入ッあの
まもエ。見ろ。世幸把ろ形へけアやアるりやせん
何時ぞ狂いの気小おあるすつこと。大ゝこ宅也物遠
さんのお嬢でも出来まゝこのでどぎのまもうゆ。
所ゐ。此男孫兄まで出来こアる。「チヤ出狂でどぎのまもう。
今まで孫小猫糞で入らまつこへ惜ゝまのそて行教

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

まゝあの宅へお連申さるゝのでござのまゝエ「ゑ〻〻お連
申てあらうか。おゝ知つぢろ「イヤ嘘だのうり「エ嘘る
あのう「ヘエ夫るう彼方の。ゑまのお宅へ入「ヱ
別荘へサ「何紙に仰ましあ「ハテサテおもまゝ
藤おるゝ。それ知れくつゝ「夫ざつて。まを
方と。竟しうんまゝるもどざいませんあの。まる〻何卒
一すお色小祝らんでどざいまをへ「サア知色小知る
せへ何の遊仕ま拵るゝと侍小あり「拵苟小。の藤ゝ小

猿の蓋紙ゝう。お宝ゞおへさつけて「サア知色小知る。
何拵ゞ色敬ゞあつて。仰ゞ美女ざらうゝゝ。猿児もそを
ゑ邪小懸て居るゝう。ゝく知て呉る可色らしの宝児ざらう
ゝゝ「ヤ居るまへ。知つまゝ正まつ。まを面小ゆゝく
居まゝゝう。まゝ例のでどざいまを子。お拵めやアゝ邪く被
ゞまゝまをい「夫ざつて男平常の内へ彩いの美女ゞ来く
居て猿四んまを達でゝん拵へ何ゞも自己ゞ猿と児と云ゝア。
誰ゞやつめへどやアれへゝ「懸小ゆゝ浮名ゞ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

ろ。乳の毒でございまして。さぞおあの板もお花でございますせう。
「サテ夫も怪敵の女や行つぢやア。天井ぢゃ。おあれゆうる女を
お板やうまアやア。外見ずもあるまい。「行ぢうまる
けのい。大造おいぢめるさいまもそ。狀のうへるみざとそつく
「狀い。おるまれ人が児ゴ、りるまるいるまでやアれ。ホンニみとのへ
お寅さん。日外おあがやさまるい。おるさんい実法世話よ居る
と言ぐ。実い在去の出廓へゆくまて。霧遊をしてある
のサ。までおけアやア。彼今おあが。何のまるもの。新して前

尾ぐく孫児まで産ぐものを。円福で初めて出れるんろ。
まさ初めてアやア。まてアぞやア居るまで板という板ぐ。
所ゴ出る行年ドやア。れ人ゴ。流産の子ろるのぐろ。ぶ板る
ろ。成ろして。乳を揉せるのも公の板へるけ。まさまドやア壁
為小まる板へ係も。ありや行ぐろ。実小まぐ初めて
やまれろ。何板成ろと業でだろ居るぐらうショト少く
怕ろうやぐも係まり傷て「何ぜも大ろ。ろ板るのぐ
らろと在ぐて居まるのサ。ア乃職振ろくッて。入ッまるれで

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

ごぞんじませうぞ。「ムヽ、主マヤア。月れ上ホ世ヨ仔細ヲ」。そこ迄今家
業ハ、父ごのゲ病気ごろう。幸ひ、ちらつかも可哀ガまごをれを汲ホ
任云ヒ、と所ガ。ラく九ラ通ハ稼ひ中こ。方私ーて又ると
近ヒ、ヤア此ち地へ帰るう。方私せ人ヒマヤア。ちこ仁私ごも
ありう〜。ムよく〜長労ー行ハ家で。楽ちんで居ゐせ人「まヤ
方私ごぞんじませう。何卒ちやく方私ちつ〜ら。何私ホう
情ようどぞんじませうまへト日来おりひよ結ごち〜。明の墨
ア中も長ちゆゆう。この「言ホ時こと。多日我洋むん花ーん。

万々ニ五ニ上ノ上 四

蔓ホうちふちの所へ「ヨヤちごョ。此ホホ私ごョト人二個の
客ーー。私ホ方ちち弱き「ちちと治ちをめて来ゐまど。
兄さんくーホ客ハ。定ラホ私ちと驚く私実。陽さんとずれ
ど陽ハ方。児成赤ーう。枕屋風も。丈低けまごオい
客ーまごど。時やーごちう逢方ムまて。ラの屋つちるその
間ホ明る栄ア我神ひ入。飛石伝ひ入来る先ホ〜ちーい
お鶴ホん。跡ちくお鶴と小間仕の。十二四ちる少女ホいおさん
我色ちのちせう。長ホ弟をつんて。襟を屋ゆる「兄さんちのるい

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

久まく お目ふかとまません。若あさんも寫くゝ中せと社仰まゝと
ゝ方様ゝ行でけつゝ指つて安りけくシご。何様てとゝ不居ると
知つゝ。庭ゝ来ゝシご人つる「今ゝ座敷へ来りまゝゝ。牛車が居
ました。お兄さんい今離亭の方へお出ごゝゝ。座敷へお面んるさい
とこのひまたゝゝ迄で「ゝ方様ゝ少ゝ一日の為さうゝ面倒で
「お御さんゝく来ゝ。まゝくとく掛るせ「様はお不出法
といゝまゝゝと迄く接拶をるうちゝ。お部ゝ月ゝ中ゝ家を
つつけ「母ゝ戸行様ゝシごゝら。お家さん。こゝやアどうも

為ゝやアありまゝせんゝと言ゝて呉まゝたるゝ。ゝ。ゝ物
もいひゝ。ゝ人ゝの影ゝのゝ。ゝれば長ゝ命も今ゝゝや
包むべき便ゝ。何ゝ一回ゝ影も合せ仔細紙ゝ。ゝ
ねつけ。ゝも物怪の幸ひとまゝゝ。ゝ下に居ませう
図らず細ゝ。ゝ実ゝ越ひ指ゝ。腹中の孩児を
産ゝ。今月ゝ日ゝ実ゝもなく。ゝ。ゝ
幸ゝゝ。ゝ産ゝ。ゝ。ゝ必ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

出さぬいこまも使者の義心と。辯解ふものゞられべ咲えび毎
小ぢ弱い弱さ。見まさも見が悪なきを。怪ぶるも限り迄。や
ありて悪こと。お実い孫伝進めや「孫ふ面目ない弱さん。
話をおやるうさぞ不実のの悪性めと。お拾も五でをまうぐ。
ぐうぐ。拾悪しに下さいまし。その云話の仕方い扨と考へても
おきまし。仏辛して松公弱さんふ。おめふかつくらの呪を
涙。その上れるふ仕方と。今までお見さんのお世話ふなり。扨
して居ますを病が切るさ。悪いとくせまいのと実は涙は

貝ぐ泣て。恨しいやう悪しいやう。他人ふ知めてるを生ぐ。
しいしまし。ぐ。強しい恋い他ふの。何の因果と扨ふ晩
ふ。涙ぐだうり居ますと。先逃を恨る任ふ。心の伝ぐ生
ぐ。実ある人も自然涙催ふ泣だりうる。況ん弱いそを
ねどふ。お実ぐいもこの通人の。金兵程度と思ふう。いち
おひの遊興なく。実果て新さんとて
ぐ。ふ人おぐ孫児を産ぐ。扨で登倚が涙を流り。
悪くふ扨ぐおいでやりませんう。支ふ今見さんのを産で

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

208
15
700

きけば身をふなつくれば音信(の)。義理が海をへだてと月とお板
ごとに。そのわけを花ごろの下枝よく兄さんが住けれお吳お
すてきまごとを。恋もあるとて音信も跡うち。恋のゆやアあるうるの
恨なり。世うへとも。こ恨を思ひて。おんなを出ておんなとなるの仮令
仮ごに仇恨ごらうとも。幼稚を花ごうと和合して。姉妹とも。おの家
と音信。何のもなもうちはて。こをてお吳のが嫁ごヨト嫁ごと積ごを
一点もなる。その恋心を素代の。女の亀遊とうと元にけま

花筐第五編巻之上終

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

208
15
700
特別

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用